

BIRD Homeopathic Remedies from Avian Realm より

<鷹狩りについて>

西洋、東洋ともに紀元前から行われてきたようで、その様子は、絵画や彫刻に残されています。当時から、支配者階級の権威の象徴とされるものだったようです。

日本では、徳川家康が鷹狩りを好んだことで有名です。

彼は単に遊興というだけではなく、養生法、視察的な意味でも重視していました。

「鷹匠組」という技術集団も側近として置いていたようです。

明治維新以降は、「大名特権」から自由化され「狩猟法」の管理されることとなりました。

<ハヤブサの調教方法>

捕獲した若鳥は、翼が十分成長するまで、足には両方に紐が付けられ、小屋に入れて、まったく自由のない環境で育てられます。

絶対に餌も自分でとらせず、鷹匠の手から与えられます。

ハヤブサを、食物なしで半暗闇に綱につないだままにし、相当な時間の後、空腹と疲労で限界にきた頃、手袋をした拳の上で一口与えます。

野生の猛禽であっても、飢えによって、食べることに駆り立てられているときには、鷹匠の手袋に足を乗せるようになります。

このようにして、徐々にハヤブサは、給餌する拳に来ることと、持ち歩かれることに慣れてきます。ハヤブサは、常に拳の上で給餌され、手袋をした手を示されると常にそこに戻るように調教されます。

調教された後は、ハヤブサは、常に頭巾をかぶられるようになります。

狩りのとき以外は、足は常に紐でくくられ、頭には頭巾をかぶせられて飼われます。

<薩摩隼人>

隼人とは、古代日本において、薩摩・大隅（鹿児島県）に住んでいた人のことを言いました。最初は大和政権に反対しましたが、やがて支配下に置かれました。

熊襲と呼ばれていた人と同じだとも言われますが、歴史的な記録では、熊襲が反抗的に描かれているのに対して、隼人は、天皇や王子の近習であったと記録されています。